学位請求論文審査報告要旨

2019 年 7 月 10 日

学位請求者　南谷　奉良
論文題目　　James Joyce and Modern Animals: Reconstruction of Dublin's Denizens

論文審査委員　　金井　嘉彦
中山　徹
三原　芳秋

１．本論文の構成

本論は、アイルランドの作家ジェイムズ・ジョイスの主要作品に現れる動物、人間ならざるもの(non-human entities)に焦点を当てて、動物を中心にジョイス作品を考察するものである。これらの動物を主にヴィクトリア朝からエドワード朝にかけて、広くは 18 世紀から 20 世紀初頭にかけての時間軸の中で歴史化し、その上で動物がテクストの中で果たしている役割、人間に引き起こす感情を分析し、そのような動物がいたがゆえに生まれた関連事象、関連の法を紹介しつつ、ジョイスがフィクションの空間に作り上げたダブリンという街を動物を中心に想像的に復元し、それをもとに動物との関連でジョイス作品が、書かれ、読まれた当時には存在していたが、今日にあっては失われた意味を復元することを試みるものである。

本論文の構成は以下の通りである

List of Figures
List of Abbreviations
Acknowledgement
Table of Contents
Introduction
Chapter I: "I Am Alive": Joyce, Vivisection and the Modern Spirit
Section A: Genealogy of Dissection Metaphors
Section B: The Victorian Vivisection Controversy
Section C: The Covert Nexus: Vivisective-Active-"I am alive"

Chapter II: Wandering Dogs and Fear of Rabies

Section A: Joyce's Fear of the "Feerrce" Dog
Section B: "Public Dog" for the Public Good
Section C: The Hidden Dimension of Joyce's Dublin

Chapter III: "Cruelty Behind It All": Bloom's Gaze at Poor Animals
Section A: Cruelty to Animals in Dublin
Section B: Bloom's Doubled Vision
Section C: Bloom's Eye on Poor Brutes
Section D: Bloom at the Knacker's Yard and Abattoir

Chapter IV: Joyce's "Force" (1898) and His Tuskers
Section A: Joyce's "Force" (1898) and Fear of Extinct Monsters
Section B: Elephants, or Queer Creatures, as the Subjugated
Section C: Ivory as Colonial Commodity

Chapter V: Emerging from the Slimy Sea:　Stephen Daedalus and the Plesiosaurus
Section A: Dublin's Sea Dragon at the Natural History Museum
Section B: The Rhyme of the Plesiosaurus
Section C: From Plesiosaurus to Dedalus/Icarus

Conclusion
Appendix I: Dog Map
Appendix II: Cattle & Horse Map
Works Cited

２．本論文の概要

序論ではまず、ジョイスと動物の関係についてはようやく過去 10 年の間に取り上げられるようになった批評の流れを確認し、それをさらに、70 年代から現在に至るアニマル・スタディーズの中に位置づけ、本論がどのような研究の流れの中にあるかを確認する。その上で従来のジョイス作品の百科全書的な性質から作中の動物の説明をするのでは、抜け落ちる動物が出るとして、南谷氏は「モダン・アニマルズ」という概念を提示し、作中の名を持たぬ動物、曖昧な動物に光を当てることを目的とすることを説明する。南谷氏が言う「モダン・アニマルズ」とは、歴史の中で、この時期に、それまでの時代とは違う、特有の意味を持ち始め、その時代から外れることでその意味を失っていく動物を指す。

第 1 章では『スティーヴン・ヒアロー』において現代の精神を説明する際に言及される生体解剖（vivisection）をフロベールに由来するものとする従来の考え方に対し、南谷氏はフ

ランスの生理学者クロード・ベルナールをモデルに自然主義を説いたゾラをもう一つのソースとする。その上で、ウィルキー・コリンズの *Heart and Science* についてジョイスが書いた評論をもとに、ジョイスが生体解剖に賛成するスタンスを取っていたのではないことを確認する。セクション B では生体解剖論争の歴史、反生体解剖運動の歴史、小説における生体解剖の扱いを概観する。セクション C では、『スティーヴン・ヒアロー』において現代の精神を生体解剖的とするスティーヴンが生体解剖という言葉で意味しようとするものを考察し、それが受動的に社会の慣行を受け入れる性質とは逆の、積極的に問題を炙り出すための行動と結びついている点を指摘する。つまり文学的生体解剖を行なうスティーヴンとは、人々のパラリシスを分析するスティーヴンであり、生体解剖とは問題を炙り出す精神的装置であることを指摘する。こうして南谷氏は生体解剖をジョイスのエピファニーという概念と等価とする新しい考えを示す。

第 2 章はジョイス研究でも人気のトピックである犬を扱う。南谷氏は、これまでの研究では犬の象徴的意味や犬の正体にのみ関わってきた点と、少数に限られてきた点を指摘し、これらの犬が、ブリーディング、ペット産業、野犬・狂犬病対策と切り離せない点も考慮しつつ、「モダン・アニマルズ」として位置づける。セクション A では、ジョイスについて犬と言えば必ず出てくるジョイスの犬嫌いという神話を歴史的資料に基づいて解体する。セクション B では、狂犬病の歴史を見つつ、南谷氏が“unfixed dogs”と呼ぶ、所有者のわからない犬、鑑札の付けられていない犬、登録されていない犬、轡をつけられていない犬への恐怖が生まれる状況を概観する。セクション C ではジョイスの世界における犬と人間の距離に焦点をあて、“Great Separation”と呼ばれるものの進行により犬が、一方で愛玩動物として愛でられつつ、他方では狂犬病への恐怖から嫌われ、避けられるという二重性を帯びていた様子を描き出す。

第 3 章では、南谷氏は『ユリシーズ』に登場するレオポルド・ブルームを取り上げ、彼が動物や弱者に対して優しい理由を、迫害を受けてきたユダヤ人であること、あるいは善き人であるということ以外に見出そうとする。セクション A では、『ダブリナーズ』中の短篇「ある出会い」を動物への優しさの歴史との関連で考察し、そこに当時の動物虐待への反感の意識の反映を見る。その上で南谷氏はレオポルド・ブルームの動物への優しさをモダン・センチメントとしての動物への優しさと位置づける。セクション B では、レオポルド・ブルームの優しさに含まれる客観的視点、他者の身に立って代理的に感じ取る感性、根底にある科学的まなざしを分析し、その視点が単純に動物に優しいということではなく、二重化されている点を見る。セクション C では、レオポルド・ブルームの優しさの背景に、彼が目にしていたサーカスにおける動物の虐待、馬の虐待があるとし、それを歴史的資料とともに示す。セクション D では、『ユリシーズ』第 12 挿話中の登場人物からブルームが屠殺場（knacker's yard）にいたと言われる点を取り上げ、当時のダブリンにおいてどのような knacker's yard があったかを歴史的資料と共に示し、そこで行なわれていた残虐な屠殺がブルームの優しさに反映されている点を見る。

第 4 章では、これまでのジョイス批評においては生きた動物あるいはシンボルとしての動物しか扱われてこなかったが、それ以外にも重要な役割を果たす動物がいるとして、南谷氏はそれらを『若き日の芸術家の肖像』で使われる語“tuskers”の名のもとに見ていく。セクション A では、1898 年にジョイスが書いたエッセイ“Force”を分析し、人間が服従させることのできなかった大型絶滅動物に対しジョイスが感じた恐怖・不安を、絶滅したマンモス・マストドンの大きな骨と牙の発見が引き起こした恐怖・興奮・好奇心・迷信と結び付けて考察する。セクション B では、人間の支配、優越性、男性性を証明するための道具となった象がこの時期特有の意味――新しさ、好奇心の対象――を持っていた点を、動物園で象が見られるようになり、人気を博した歴史、『ユリシーズ』における“Elvery's Elephant house" (*U* 6.252-53)という店の前に置かれた象の像、『スティーヴン・ヒアロー』中のマリンガー・エピソードで触れられる象の分析を通して見る。セクション C では、『若き日の芸術家の肖像』において少女の手の比喩として用いられ、ブラシの背、ナイフの取っ手、ピアノのキーを通じて言及される象牙の意味を、当時のコンゴ自由国において象牙の残酷な搾取が行なわれていた歴史的背景をふまえて解読する。そして、動物をめぐるジョイス的視点の二重性が、ものごとの背後にあるものを示唆する『ユリシーズ』のレオポルド・ブルームの視点を通じて象牙産業の残酷さを暴いていることを指摘する。

第 5 章では、南谷氏は『スティーヴン・ヒアロー』で言及されているプレシオサウルスに着目し、なぜこの特定の爬虫類への言及がなされるかを問題にする。この爬虫類のイメージの系譜、ジョイスの時代においてプレシオサウルスが持っていた意味を歴史的に検証することで、南谷氏はその失われた意味を再構築する。セクション A では、1848 年にホイットビー（Whitby）で発掘されたプレシオサウルスがダブリンの国立博物館で 1890-1922 に展示されるようになった経緯を歴史的資料を用いて示し、それがジョイスのインスピレーションの源泉となったとする。セクション B では、スライム、泥の中にいるプレシオサウルスという表現のソースを系譜的にたどり、ジョイスの時代にも使用されていたことをもとに、ジョイスがその系譜に即した表現をしていた点を示す。セクション C では、制御しきれない、爆発しそうな力、大きな不満を指す比喩として使われるプレシオサウルスが、同時にこれから現れ出る芸術、スティーヴン自身の表象でもあるとし、『若き日の芸術家の肖像』では鳥のイメージで表されるようになる芸術家像が、『スティーヴン・ヒアロー』においては泥から這い出て陸に上がるプレシオサウルス像で表象されていたとの指摘をする。

結語では、南谷氏は本論の五つの章で扱った動物が相互に関わる点を説明しつつ、ジョイス作品中でも動物に触れられるのが、初期より、後期の作品（『ユリシーズ』、『フィネガンズ・ウェイク』）の方が多い点を指摘し、まとめとする。

3　本論文の成果と課題

本論文の第一の意義は、その企図にある。ジョイスに関するアニマル・スタディーズの観点からの研究は、論文としてはいくつかあるが、本の長さのものはこれまでにない。南谷氏

は、明確な問題意識と方法論に基づき、ジョイス作品における動物がジョイスの時代においてどのようなものと見られ、どのような意義を持っていたかを豊富な一次文献にあたることで見事に示している。

第二の意義は、そのスタイルにある。記述が細部に至るまでしっかりしていることは言うに及ばず、英語のまま本として出版してもよい程度の質の高さを有している。本論文は南谷氏がこれから国際的な活躍をする資質を持った研究者であることを示している。

第三の意義は、南谷氏のこれまで使われることのなかった歴史的資料をふんだんに用いる研究法からもたらされる歴史的発見にある。現代に住むわれわれからすれば『ユリシーズ』に登場する犬も、今の犬と同じように見てしまうが、南谷氏はジョイスの時代に至る犬の扱いと狂犬病に対する恐怖の歴史を示すことで、『ユリシーズ』に登場する犬が今日の犬とはまったく異なるまなざしを向けられる存在であったことを示す。また、『ユリシーズ』で言及される knacker は、これまで注すら付されることのなかった存在であったが、南谷氏は歴史的資料をもとにこれがどのような存在で、ダブリンのどこにあったかを本論文で明らかにしている。ほかにも、『スティーヴン・ヒアロー』で言及されるプレシオサウルスも、これまで着目されることのなかった動物だが、南谷氏はこの爬虫類が言及される背景にある歴史と系譜を資料をもとに教えてくれる。このようにしてジョイスの時代の目線に沿った動物像を今日の読者に復元して見せてくれる学術的意義は大きい。

第四の意義は、それらの歴史的発見を活かして南谷氏がジョイス作品の新たな解釈につながる発見を行なっている点にある。たとえば『スティーヴン・ヒアロー』中で使われる“vivisective”という言葉が、単に自然主義や生体解剖に関わるだけでなく、ジョイスの美学の根本に関わる点を明らかにしたのは、ジョイス研究上大きな意味を持つ。同じく、ジョイスが作品中で用いたイメージを丹念にあたりながら南谷氏が示した、プレシオサウルスがダブリンという泥の中から現れ出るべき芸術家像であるとの指摘は、従来の『スティーヴン・ヒアロー』と『若き日の芸術家の肖像』解釈に変更をもたらす重要な意義を持つ。

とはいえ、本論文に問題がないわけではない。まず第一に、本論は“James Joyce and Modern Animals: Reconstruction of Dublin's Denizens”というタイトルが与えられているのであるが、肝心の「モダン・アニマルズ」の定義がきちんとした形では行なわれていない。所々で示される説明からその意味するところは伝わるが、鍵となる概念だけに、序論においてきちんとした定義づけをしておくべきであっただろう。第二に、ジョイス作品を歴史的に読むのはよいとしても、それに引きずられてテクスト自体の読みが浅くなっている部分がある。ジョイスが動物を織り込みながら示したテクストが持つ意味を、もう一段高い次元からとらえ直してみる作業も必要だろう。もう一点は、ジョイス作品における動物を見ることに力が注がれ、文学作品としてのジョイスにまで踏み込んでいない場合がある。動物を歴史化するのであれば、同時代の作家には、同様の動物が出てきてもおかしくないだろう。その中でなぜジョイスと動物なのかが問われなくてはならないだろう。

以上のような問題点もあるが、これらは今後の研究において活かされるべき点であり、本

論文の価値を損なうものではない。

４．結論

以上のことから、本論文が学位論文に値するすぐれた研究であると認め、著者南谷奉良氏に一橋大学博士（学術）の学位を授与することが適当であると考える。

最終試験結果の要旨

2019 年 7 月 10 日

学位請求者　　南谷　奉良
論文題目　　James Joyce and Modern Animals: Reconstruction of Dublin's Denizens
論文審査委員　　金井嘉彦、中山徹、三原芳秋

2019 年 6 月 13 日、本学学位規則第 8 条第 1 項に定めるところの最終試験として、学位請求論文提出者南谷奉良氏の博士学位請求論文に関する疑問点について逐一説明を求め、あわせて関連分野についても説明を求めたのに対し、南谷奉良氏は誠実に対応し、いずれについても十分かつ適切な説明を与えた。

よって審査員一同は、一橋大学博士（学術）の学位を授与されるに必要な研究業績および学力を氏が有することを認定し、最終試験での合格を判定した。